（昭和16年7月30日第3種郵便物認可）　日刊・第26643号

2月28日（火）2017年

新潟日報

Otona
おとなプラス

新潟を出て３日目。紀州灘に沈む夕日が赤ちょうちんに見えてくる時間帯だ。写真が不出来なのは前夜の深酒のせいではなく、腕が悪いから（１月６日午後５時前、紀勢線下り、紀伊田辺―御坊間の車内から）

各駅停車　用のない旅

ちょっと散歩に。

そんな気分で年に何度か、各駅停車に乗って旅に出る。

目的はあまりない。

願望は、少しある。

「鉄道に、長くゆっくり乗ること」と、「下りた駅の路地裏で、軽く一杯やること」である。

「軽く」は、たいてい失敗するが…。

同じ趣味嗜好の先人がいた。

夏目漱石門下の小説家で随筆家、元祖〝乗り鉄〟、内田百閒である。

わが師と仰ぎたい偏屈おやじが、汽車旅の悦楽をつづった「阿房列車」シリーズは、その筋の人々に愛読されてきた。

シリーズ冒頭、「特別阿房列車」に出てくる名文句。ご存じの向きも多かろうアレに旅心がくすぐられる。

「用事がなければどこへも行ってはいけないと云うわけはない。なんにも用事がないけれど、汽車に乗って大阪へ行って来ようと思う」

年明け早々、百閒にくすぐられ「なんにも用事がないけれど、行って来よう」と思い立つ。

当たり前のことながら、用事がないので出張ではない。

安くてたくさん乗れる切符なら、以前「おとなプラス」でも紹介したJRの「青春18きっぷ」が頼もしい。

年3回、春夏冬の販売だ。冬季の利用の最終盤、以前から気になっていた紀勢線や飯田線をガタゴトと散歩してきた。今回は私鉄なども使った6日間の旅。

期待はご無用。

百閒も言った。「これからその話をすると云っても、往復何の事故も椿事もなく、汽車が走ったから遠くまで行き著き、又こっちへ走ったから、それに乗っていた私が帰って来ただけの事で、面白い話の種なんかない」（「春光山陽特別阿房列車」）。

バッグに百閒の文庫を入れた。旅のお供に、乗り鉄、飲み鉄の先輩にご同行いただくという算段である。

（論説編集委員・野沢達雄）

青春18きっぷ　１万1850円で５日（５人）分、ＪＲ全線（特急、新幹線、急行、ＪＲバスを除く）に乗車できる。ことしの春季の発売は３月31日まで。利用期間は３月１日から４月10日まで。年齢制限はない。

内田百閒　岡山県出身。本名は栄造。号は百鬼園。小説「冥途」「旅順入城式」や「百鬼園随筆」など独自の作風で知られる。「阿房列車」は1950年代に執筆したユーモアたっぷりの紀行シリーズ。（1889―1971）